



令和7年度 第1回共同機構研修会（動画配信）

令和7年4月11日（金）～5月9日（金）

子どもの心を育てるといふ視点から不適切保育を考える ～特に、「養護の働き」の質に注目して～

講師 鯨岡 峻 京都大学名誉教授

人間は、自己充実欲求「私は〈私〉」と繋合希求欲求「私は〈私たち〉」と言える心の動きの中で喜怒哀楽の心の動きに翻弄されながら、バランスをとって生きていくように育てられて大人にならなければなりません。また、子どもは育てられて育ち、親は子どもを育てることを通して親として育てられます。保育者も、かつてはみな、保育される者であり、目の前の子どもの姿は自分も辿ってきた姿なのです。そう考えることで子育てや保育の



営みに柔軟性がもたらされ、子どもの心に寄り添うことができます。「自分事」として考えることで、信頼感

や安心感が最も大事な心であることが分かり、「養護の働き」によって自己肯定感が高まります。しかし、「養護の働き」だけでなく、大人の願うことに向けて、誘う、導く、教える、伝える、そして、禁止や制止を示し、叱るという「教育の働き」も重要です。ただ、「養護の働き」と「教育の働き」は衝突しやすく、子どもに向ける時に難しさが現れます。そこで子どもの「い



ま、ここ」での心の動きを掴み、対応の中で紡ぎ、コミュニケーションを展開していく必要があります。

「養護の働き」→←「教育の働き」

近年 SNS 等で見聞する「不適切保育」という言葉に皆さんは疑問や腹立たしさを覚えますか？保育行政で「不適切保育」に該当するものとして挙げられている「虐待等」のカテゴリーには当てはまらない、保育の場での出来事が「虐待」「不適切保育」として、保育者との信頼関係が希薄な最近の保護者には捉えられているのかもしれませんが。その中にはこれまで保育や学校教育において心の育ちを十分に支えられて来なかった保護者がおられることも視野に入れ、今後の保育や教育に真摯に関わっていきたいところです。

保育者は、安心して子どもを預けてもらえるよう、「保育の質」・・・つまり、「養護の働きの質」や「教育の働きの質」を高め、保護者との信頼関係を築いていかなければなりません。

⇒⇒⇒ この講演は、『貸出DVD』で御視聴になれます。

***** 受講者のコメントから *****

自分自身が普段、子どもたちに対してどのように声をかけ、関わっているか、振り返るきっかけになりました。今後に生かしていきたいです。

今回、改めて毎日の保育を見直すことが出来ました。なかなかうまくいかないこともあります。これからも子ども達と向き合い頑張っていきたいです。

これから子どもたちと関わっていく上で大切にしなければならないことを学びました。



とても分かりやすく、考えさせられることが多くありました。先生同士も寄り添う気持ちを持って、あたたかい幼稚園にしたいと思いました。

子どもの発達特性と保護者へのアプローチ



講師: 岡崎 達也さん(公社)京都市児童館学童連盟事務局主任厚生員統合育成担当



今回の研修は、①保護者支援の在り方、②保育場面の保護者支援、③就学移行支援、④虐待と発達特性、をポイントにお話します。

発達障がいの子どものは、脳の情報処理の仕方が、定形発達の子とも違うため、気になる行動となって表れることがよくあります。育てるのにコツがいる子どもなのだと思え、子育てを頑張っている保護者を理解し、その苦勞をねぎらうことが保護者支援の基本となります。

場面による子どもの姿の違いや保護者と保育者の思いのずれから、互いに責任転嫁してしまうという危険性もあります。子どもの困りを支援するためには、互いの状況や思いを理解し合い、情報を共有し合う必要があります。

関係機関へつなげる際も、子どもの問題点を指摘することより、保護者の子育ての困難さに共感し、相談することによって、子どもや保護者の困りに対する手がかりが得られることを伝えるとよいでしょう。優先したいのは、診断よりも、その子の特性を理解しうまくつきあえる術を共に探っていく対応(支援)です。

小学校との引継ぎは、就学支援シートや保育要録等の文書で行うことが多いと思いますが、園の伝えたい情報と学校の知りたい情報に違いがある場合も見られるので、情報交換の場が設けられると良いと思います。また、学童保育への情報提供もお願いしたいと思います。

まずは、園の職員みんなで、その子どもの長所や特性について共通に理解して援助できるよう工夫しましょう。

DVD貸出中

アンケートより



健診の時期までのアプローチの仕方と、就学に向けてのアプローチを、今の時期に知ることができたので、とても良かったです。すぐ療育につなげようとしてしまっていたので、まずは、どのような相談機関があるかを知りたいと思います。

何のために支援するのか。発達障がいの特性を治すのではなく、日々の生活をしやすいするための支援だということを学びました。TASPやCLASPという方法も初めて知りました。



小学校で働いているので、保育士の先生方が受ける研修を受けられたのはとても新鮮でした。様々な面で集団の中で過ごすことが難しいのではないかと見受けられる子どもが、年々増えてきているように感じます。保幼小それぞれの立場の先生が同じ研修を受けることができるのはとても良いと感じますし、それぞれ実情を踏まえた上で、今回の研修をどのように受け取られたか交流してみたいと思いました。

その他、動画配信研修について、受講しやすさや繰り返し見られて理解が深まるという御意見を多数いただきました。今後も、子どもや保護者のために「学びたい!」という先生方の声に応え、研修方法や内容を検討していきたいと思えます。



幼児期のトラウマの理解と 保育士・教師の支援と対応

講師：竹内 吉和さん 竹内発達支援コーポレーション代表

今回の研修は愛着障害、発達障害をキーワードに、虐待とトラウマについて話します。

【事例紹介】

「心理的虐待から愛着障害、そしてギャンブル依存になったAさんの事例」

「心理的な虐待」は後々の人生に大きな影響を与えることがわかってきています。

【この15年間の特別支援教育について考える】

特別支援教育制度によって、複数の障害種別を対象として教育できるようになり、発達障害の子どもたちも通級による指導の対象となりました。制度は整ってきましたが今、成果が問われています。

【親にとってわが子の障害を受容するという事について考える】

障害受容は、ショック⇒否認⇒怒り⇒適応⇒再起のような段階を経ます。発達障害は明確な証拠があるわけではないので、ほとんどの場合、受容するのに時間がかかります。保育士・教師は親との人間関係を築いて、親の思いを聴きながら支援していくこと、子どもだけでなく親への支援も重要です。

【「児童虐待」「ヤングケアラー」「愛着障害」「発達性トラウマ」について考える】

「児童虐待」は、そのハイリスク群を知り、早期発見が重要です。「ヤングケアラー」は、児童虐待に近い概念と捉えています。孤立していますので、周りの大人が気付くことが大切です。「愛着障害」の子どもは、安心感がない状態で育っているので愛着形成がその対応となります。「発達性トラウマ」は、幼少期から続くトラウマによるストレスや緊張にさらされる（多くは虐待が原因）ことで起こる、心身の不具合です。対応が難しいので、予防が大事です。

【親への支援について考える】

「二八の療育」（清水康夫先生）と言われます。子どもへの対応は2割、親への支援は8割ということです。親への支援とは、今の状態の中で、褒めていくことです。例えば、保育園に連れてきたことを認めて褒めることが親への支援となることがあります。

「発達性トラウマ障害」は発達障害、愛着障害とも違いますが、非常に近い位置にあります。診断名ではありませんが子どもの状況を理解するのに重要な概念です。主な原因は虐待ですので、早期発見、予防、親への支援が重要です。

アンケートより

発達障害、愛着障害、発達性トラウマ障害の違いが分かるようで難しいと感じた。最後のエピソードは本当に感動的、子ども親もいいところを見て褒めたいし、褒めてほしいと感じた。

愛着障害について学びたく受講しました。保育者の関わりでも形成修復可能と聞き、これからも愛情をもって一人一人に関わっていきたいと思いました。



愛着障害と発達障害について、具体的な事例もあり、とてもわかりやすかったです。当てはまる生徒がいて、その生徒に対する見方が変わりました。

勉強不足のところもありすべてをかみ砕けていないかもしれませんが、今後も子どもたちやそのご家庭へのサポートを考え続けていきたいです。

DVD貸出中

こどもみらい館 子どもたちの心の育ちをつなげる 第6期 研究プロジェクト 合言葉は「子どもを真ん中に大人同士がスクラムを!」

桃山東小学校・青風和泉幼稚園・桃嶺保育園

■令和7年5月29日(木) 京都市立桃山東小学校では、校区内の就学前施設である青風和泉幼稚園、桃嶺保育園に呼び掛け、顔を合わせて、共に学ぶ、「はじめの一步」を踏み出されました。京都市教育委員会学校指導課の架け橋コーディネーターにも御参加いただきました。

■「はじめの一步」は、顔合わせと合同研修会。「幼保小接続のはじめの一步～幼児期の学び・育ちを小学校の学び・育ちにつなげるために～」と題して、京都教育大学 准教授 佐川早季子先生にお話しいただきました。途中で、動画を視聴したり、小グループに分かれて「おしながき」に沿って話し合ったり・・・。心に残る、今後へつながる大きな「一步」になったのではないのでしょうか。



参加者の声

○幼児期の学びの形というのは、これまで自分が考えていた以上に主体的で自由な学びであると感じました。この子どもたちの経験を生かした小学校での教育ができればいいと思いました。

○幼稚園、保育園でどのようなことをしているのかが分かった。小学校でもその学びを大切にして、子どもを育てて行きたいと思います。

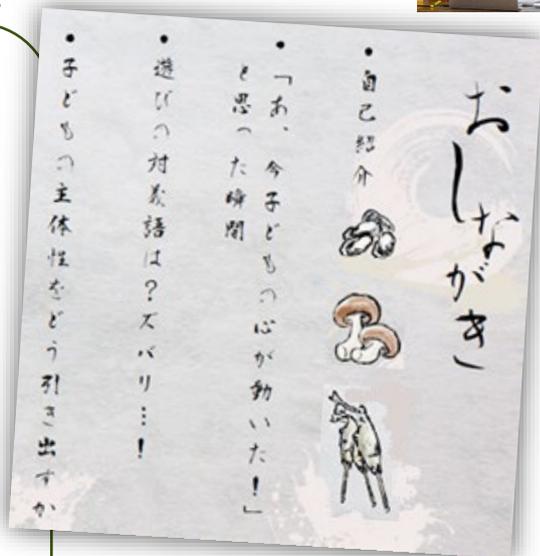
○「学校が子どもたちを迎え入れる準備・環境を考える」という言葉がずっと入りました。子どもたちの主体性を失わず、みんなで楽しむ、前に進むことができる場所になるよう、工夫をいろいろ考えていきたいです。

○子どもたちの心が動くような、授業や遊びをしていきたいなと思いました。「できる!」「できた!」を引き出せるような声掛けをしたいです。

○保幼小連携・接続の話を聞いて、幼児期の育ちや学びを生かした小学校教育の実践が必要不可欠だと学ぶことができました。

○今回お誘い頂きありがとうございます。小学校の先生と話をさせて頂けたこと、嬉しかったです。

○卒園した子どもたちが、気持ちが温かい先生方に囲まれて楽しく過ごしているんだろうと安心しました。保育士として初心に戻るような研修でした。



研修会の後も子どもの情報交換

第6期研究プロジェクトでは、協力校・園・所の関係者が、参観、合同研修、検討会等によって互いの実践や、子どもの見方を知り合い、子ども・教育・保育への理解を深めつつ、連携・接続を進める取組の在り方を探っています。顔見知りになることも大事な一步です。プロジェクトの取組は、今後、実践例として他の保幼小とも共有しようと考えています。研究プロジェクトでは、子どもを真ん中に、心の育ちに着目して保育・教育実践の質の向上をめざしていますが、さらに幼保小の架け橋プログラムへつながっていくことを願っています。

子どもを育む喜びを感じ、
親も育ち学べる取組を進めます。

[京都市はぐくみ憲章]より



この印刷物が
不要になれば
「雑がみ」として
古紙回収等へ!



発行日 令和7年 8月 25日
発行者 京都市子育て支援総合センターこどもみらい館
〒604-0883 中京区間之町通竹屋町下る楠町 601-1
Tel : (075)254-5001 Fax : (075)212-9909
URL : <https://www.kodomomirai.city.kyoto.lg.jp/>